

# 指示代名詞の直示用法における領域調査

—高橋調査法による、2010年中四国地方の若者のコソア—

岡 崎 友 子

## 1. はじめに

様々な論考でも言われているように、近年、指示詞の直示用法（「現場指示」とも呼ばれる、以降「直示用法」のみ）の研究は進み、かなり精密にその用法が明らかとなってきている。筆者も（岡崎2010等）、それらの研究成果をもとに、現代語の指示詞について考察をおこない、さらに古代語の指示詞を調査し、直示用法の歴史的な変遷を論じてきた。そして最近では、方言に見られる特殊なア系の観念用法についてもフィールドワークをおこない、用法の分析を進めている<sup>（注1）</sup>。

さて、そのように指示詞研究を進めていく中で、安部（2008：74）の「語感を異にしているもの同士が、同じ用例に対して、異なった（自身の）言語体系からの解釈を議論していることによる議論のずれの可能性も、指摘できるように思われた」という指摘は、大いに共感できるとともに、安部（2008）による直示用法の領域調査は、これまでの指示詞研究が見過ぎてきた重要な研究の基礎の必要性を指摘していると思われる。安部（2008）で述べているように、世代差や地域差による指示詞の用法の違い、特に指示詞の基本的な用法である直示用法がその多様性を見せるのは何故なのか、それを明らかにしておかなければ、これからの指示詞研究の発展は望めないと考えられるのである。

そこで、本論では高橋・中村（1992）の調査法にもとづき、中四国地方（主として岡山県）の若者の直示用法における指示領域を調査し、その用法を明らかにしていく。そして、この調査は今後の直示用法の調査を、より精密化させていくためのものでもあり、今回の成果・反省点を通して、どの地域・世代で調査をおこなっても、環境に左右されない正確なデータが採取できるような調査法を整備していきたいと考える。

## 2. これまでの問題点

これまでの問題点については安部（2008）で指摘されるように、服部（1961、1968）、宮田（1961）に見られるような個人差（この場合地域差）があることが指摘されているにもかかわらず、それらの差異の多様性自体が明らかになっておらず、そして、さらなる問題として、その事が指示詞研究において、ほとんど議論されていないことである。

具体的には（安部2008）、

- （1）① （服部1961・1968、宮田1961）

聞き手に対し、話し手の背後のものをソで指示できるかどうか

② (高橋・鈴木1982)

聞き手と話し手の中間領域にあるものをアで指示できるかどうか

③ (高橋・鈴木1982、高橋・中村1992、安部2008)

②は話し手と聞き手の間の距離がどのくらい開いた場合に生じるか

④ (中村1990、高橋・中村1992、安部2008)

中間というより、聞き手近辺の聞き手側・聞き手よりのものもアで指示できるかどうか

また、本論では高橋・中村(1992)、安部(2008)で言及のある、

⑤ どのくらい距離から聞き手が話し手と離れ、聞き手領域(ソ)の層を形成し始めるのか

以上、本論では出来る限り①～⑤すべてに注目し論じていきたい。

### 3. 高橋・鈴木(1982)、高橋・中村(1992)、安部(2008)の調査法と結果について

先行研究における調査法と、その結果についてまとめておく。

#### 3.1 高橋・鈴木(1982)、高橋・中村(1992)の調査法と結果

##### (I) 調査法

高橋・鈴木(1982)について、実験教室は横8.6m×縦12m、座席は縦8×横8、被験者は43名であり、そのうち関東出身者35名だけについて、合計70枚の調査票を分析している。なお、次の高橋・中村(1992)では実験方法が変わっており、安部(2008)は後者の実験法を採用している(後者の実験法を、安部(2008)と同じく「高橋調査法」と呼ぶ。本論の調査も、この高橋調査法にもとづいておこなっている。この高橋調査法については、図1に示す)。なお、この高橋・中村(1992)では、高校3年生と大学生、そして30～40代の婦人と、異なった年代(各20名以上)の調査をおこなっている。

##### (II) 結果

高橋・鈴木(1982)の結果としては、1)話し手と聞き手が近い場合「われわれ」という領域を作り、その中がコ系、ソ系は領域外の少し遠いところ、ア系はさらに遠いところに出る、2)話し手と聞き手が離れると、それぞれの領域を作る。コ系は話し手のまわり、ソ系は聞き手と話し手のコ系のまわり、ア系は二つのソ系のさらに外側に出るというものである。この分析の重要な点は、「われわれ」領域の場合には、話し手は距離区分で指示をおこない、話し手と聞き手が離れると、話し手は聞き手領域のソ系と、話し手からの距離(比較的近い)のソ系の二つを使い分けているというところであると考えられる。

次に高橋・中村(1992)について特に興味深い結果は、高・大学生は5-6mになるとソ系(聞き手)の伸びが止まり、ア系がまじり始め、さらに8-9mになるとソ系の存在がまれになるという点である(30-40代は話し手と聞き手が離れても、聞き手のソ系の層はいく



(II) 結果

安部 (2008) の結果については、本論の被験者と比較的世代が近く (今回は2010年で20歳前後)、もし違いが出るのであれば地域差が観察できると考えるため、本論の調査結果と比較していく (安部 (2008) の結果は、該当箇所適宜参照する)。

4. 2010年、中四国地方 (岡山県中心) の若者の直示用法の領域

4.1 本論の調査について

本論でおこなった調査について述べていく。まず、調査をおこなう前に、高橋調査法にもとづいて、以下の説明をおこなった。(以下、説明)

みなさん、私は〇〇です。よろしくお願いします。私が、「X番の人、立ってください」と言いますから、X番の人は立って番号札を胸の位置に掲げてください (実際に立ってもら)。つぎに、私が「X番の人はどの人ですか?」と聞きますので、皆さんは、まずお答えになる前に「〇〇さん (私の名前です)」と、必ず呼びかけてください。そして、私が「はい」と答えますので、その後、「コノ・ソノ・アノ」という指示語を使ってお答えください。つまり「X番は、コノ・ソノ・アノ人です」と言ってもらうわけです。

次に、お渡しした用紙に、「コノ・ソノ・アノ」どれでお答えになったか、記入してください。書き方は、「コノ」を使ったら、用紙のX番のところに「コノ」を書き入れます。では、よろしくお願いします。

使用した調査票を図2 (大きさはB4) に示しておく。

図2

コソア調査  
2010年7月30日

Q: ( )番は、どの人ですか?  
→A: ( )番は、  
(コノ・ソノ・アノ)人です。

(開封後番号は「コノ・ソノ・アノ」  
の数字を記入して下さい)

氏名 ( )

年齢 満 ( )才 男・女

出身地 ( 県 市 )  
(出生地 → → )

両親の出身地  
父 ( ) 母 ( )

開学 ( 53・34 )

椅子 (あはE) の席番 ( )

61	51	41	31	21	11
62	52	42	32	22	12
63	53K	43	33	23	13
64	54	44	34K	24	14
65	55	45	35	25	15
66	56	46	36	26	16
67	57	47	37	27	17

注: 指示対象X番は番号を□で囲ってあるもの。

先に述べたように、調査方法については高橋調査法にもとづいているが、聞き手の位置の変更をおこなった。これは安部（2008）の、聞き手31番は教室の最前列であるため、聞き手の四方にまんべんなく対象物を位置させることができないとの指摘から、本論は聞き手のまわりに指示物をまんべんなく位置させることのできる53番にした。なお、もう一つの聞き手の位置は、高橋調査法と同じ34番である。

#### 4.2 調査実施日・場所および被験者について

調査は2010年7月30日、就実大学において就実大学1～4年生の31名におこなった。被験者は、岡山県26名（内訳：岡山市14名・倉敷市4名・総社市1名・高梁市1名・浅口市1名・備前市1名・玉野市2名・和気郡1名・小田郡1名）、香川県1名（さぬき市）、広島県2名（内訳：福山市1名・三次市1名）、島根県2名（松江市）の中四国地方出身で、現在も同じ地域に在住の計31名である。ただし、聞き手34番は31名すべての調査をおこなったが、53番については時間の関係から22名の調査となった。

#### 4.3 調査における問題点に対する本調査の方針について

安部（2008）は調査において以下の問題があることを指摘している。本論でまとめると、

(2) a 指示対象の相対的な大きさ

b 聞き手・話し手の置かれている空間の広さ

c 聞き手・話し手の置かれている空間の開放性

d 指示物が、聞き手・話し手の視線とほぼ同じ高さにあるか、かなり下方か

e 聞き手・話し手それぞれに見える位置にあるものか、見えない位置にあるものか

f 聞き手が既に認識しているものを指示するのか認識していないものを指示するか

g 指示物が「事物」か「場」かによる相違

(2) a について、高橋調査及び安部（2008）と同じく「人」を指示対象とする。なお、番号札についてはA4の紙に番号を書いて用いた。

(2) b について、安部（2008:81）は調査を実施して感じられた課題としてあげているが、今後の調査法を整備していく上で重要な点であると考えられる。今回の調査では横7.1m×縦12.8mの中教室程度の部屋を選択した。これについては、今後の調査において場所を確保する際に、常に100人を超えるような大教室は難しいと考え、条件の統一のために中教室でおこなうことにした。

(2) c の空間の開放性は、教室であるため四方に壁（一面は窓）がある空間である。

(2) d の指示物への視線の上下方向についての問題であるが、本調査では話し手も立ちあがり、指示対象である学生は番号札を安部（2008）と同じく胸に掲げることにした。こうすることで、視線の上下は無くした。

さらに、安部（2008）は課題として、話し手（着座した回答者）の指示物（立った学生）への体の向きをあげている。本論の調査では、安部（2008:80）の「話し手（回答者）は、聞き手に対して、常に体を正面に向けた状態で回答する。」というように、一律に指示すれ

ば体の向きを統一できたであろう。」という指摘から、話し手（回答者）と聞き手が、お互いに常に正面を向きあった状態で回答できるようにするため、両者とも立ってやりとりをおこなうことにした。なお回答に関しては、話し手（回答者）は、ファイルに調査票（図2）を付けて立ったまま記入をおこなっている。

## 5. 調査結果と分析

調査結果と分析について述べていく（以下「コノ・ソノ・アノ」は、コ・ソ・アと示す）。

### 5.1 聞き手34番での距離別分布図の解説

#### (A) 話し手から聞き手までの距離：0.5m以上～1m未満（1人）図3

話し手を中心に半径およそ1.5mの円(①)を描くと、①の内側はすべてコである。①の外側に半径およそ2.7mの円(②)を描くと、②の内側に(①の内側を除き)ソとアが混在する。その円の外側はすべてアである。

安部(2008)と比較すると、アは少々距離が異なるが分布は類似する。ただし、(安部2008には見られない)コが話し手の後方にも見られた。またさらに(安部2008にはない)ソが、話し手後方と聞き手の後方に見られた。これについては、高橋・鈴木(1982:29)の

話し手ときき手が接近している場合、「われわれ」という領域をつくり、その「われわれ」の領域内のものをコ系であらわし、領域外で、比較的近ければソ系で、それより遠ければア系であらわす、というように話し手、きき手から対象までの距離の遠近によって指示される。

と指摘される「われわれ」の領域による指示と考えられる(これを、以降本論では「われわれ」指示と呼ぶ)。

#### (B) 話し手から聞き手までの距離：1m以上～1.5m未満（5人）図4

話し手を中心に半径およそ1.5mの円(①)を描くと、①の内側はすべてコであり、特に話し手のまわりと、聞き手の側面から前方に、コは多く分布する。なお、聞き手の後方にはソがまとまって見られ始めるが、話し手の後方にもソが見られる。①の外側に半径およそ3.6mの円(②)を描くと②の内側に(①の内側を除く)コ・ソ・アが混在し、②の外側がすべてアである。このようにこの(B)もまた(A)と同じ「われわれ」指示であると考えられる。なお、安部(2008)の図と比較すると、かなりコ・ソ・アの分布が似ているが、ソの数が少ないことが指摘される(他の34番の結果も同じ。これについては、聞き手34番のまとめで述べる)。コ・ソ・アそれぞれの数については(回答者は本調査と安部(2008)は同じ人数)、本調査ではコ18・ソ18・ア46、安部(2008)コ15・ソ25・ア42である。

#### (C) 話し手から聞き手までの距離：1.5m以上～2m未満（6人）図5

話し手を中心に半径およそ1.8mの円(①)を描くと①の内側はほぼコである(1つのみソ)。

①の外側に3.15mの円(②)を描くと②の内側にコ・ソ・アが混在し、②の外側はほぼアである(1つのみコ)。図5から分かるように、この範囲もまた「われわれ」指示と考えられる。(安部(2008)と比較すると話し手の後方にソは出ていないが、その他の分布は似ている)

#### (D) 話し手から聞き手までの距離：2 m以上～2.5m未満(6人) 図6

話し手を中心に半径およそ1.5mの円(①)を描くと①の内側はすべてコであり、①の外側におよそ2.55mの円(②)を描くと、②の内側には(①の内側を除く)コ・ソ・アが混在する。コについては、安部(2008)と比べると聞き手側までかなり迫っている。さらに②の外側に半径およそ3.75mの円(③)を描くと、③の内側に(①②の内側を除く)ソ・アが混在し、③の外側はすべてアである。

ソについては、聞き手を中心とした半径およそ3mの円の内側に多くみられ、これらは聞き手の側面のやや前方から後方に位置している。このことから(D)は、聞き手領域(ソ)の層を形成し始めているものと予想される。また、この聞き手領域(ソ)の層の中にアが入り込んでいる(この点も安部(2008)と相違する)。

なおソの数について、特にこの距離において安部(2008)より数が少なく、本調査ではソは20(回答者6名)、安部(2008)では64(回答者10名)である。

#### (E) 話し手から聞き手までの距離：2.5m以上～3 m未満(7人) 図7

話し手を中心に半径およそ1.65mの円(①)を描くと、①の内側はすべてコであり、①の外側に半径およそ2.4mの円(②)を描くと、②の内側に(①の内側を除く)コ・ソ・アが混在、さらに②の外側におよそ5.4mの円(③)を描くと、③の内側に(①②の内側を除く)ソ・アが混在する(1つのコ有)。③の外側はほぼアとなる(3つのソ有)。

また、聞き手を中心におよそ半径3mの円を描くと、その円の内側にソが偏る。(D)よりもさらに聞き手領域(ソ)の層が形成されていると考えられる。また話し手の左右前方にもソが見られることから、話し手からの距離のソ(高橋・鈴木1982)も観察できる。

なお、安部(2008)の同範囲の結果と相違するのは(D)と同じく、話し手と聞き手の中間領域の、聞き手よりの左右の位置(さらに聞き手のすぐ後方)にアが見られ、これらのアはかなり聞き手領域に食い込んでいることから、第2章(1)④の中間というより、聞き手近辺の聞き手側・聞き手よりの対象に対するアであると考えられる。

#### (F) 話し手から聞き手までの距離：3 m以上～3.5m未満(5人) 図8

話し手を中心に半径およそ2mの円(①)を描くと、①の内側はすべてコであり、①の外側に半径およそ3.4mの円(②)を描くと、②の内側に(①の内側を除く)コ・ソ・アが混在する。さらに②の外側に半径およそ5.4mの円(③)を描くと、③の内側に(①②の内側を除く)ソ・アが混在し、その③の外側はすべてアである。

ソについては、話し手のまわりのコの外側に出ているものと、聞き手を中心としておよそ半径1.2mの円の内側に多くみられる。また、この円の中にはアも少し見られる((E)の聞き手よりの対象に対するア)。

### (G) 話し手から聞き手までの距離：3.5m以上～4m未満（1人）図9

話し手を中心に半径およそ2.1mの円(①)を描くと①の内側はすべてコであり、その外側の半径およそ3.3mの円(②)を描くと②の内側に(①の内側を除く)ソとアが混在する。②の外側はすべてアである。ソは話し手と聞き手の中間領域の聞き手よりのほぼ前方のみに見られ、聞き手の側面より後方はすべてアである(聞き手のすぐ後ろはア)。なお、この(G)では話し手と聞き手の層は分離している。

## 5.2 聞き手34番のまとめ

聞き手34番について安部(2008)とほぼ同じ結果が出たものについては、

- (あ) 2mを越し始めると聞き手の領域(ソ)の層を形成し始める。
- (い) 聞き手周辺のソのほうが、話し手のコよりも広い(ただし、安部(2008)よりさらにコが広い)。

安部(2008)の結果と相違する点については、

- (う) 0.5m～1m未満で話し手の後方と聞き手の後方にソが見られる。
- (え) 話し手と聞き手が2m以上離れ聞き手領域(ソ)の層が形成された際に、聞き手近辺の聞き手側・聞き手よりのものがアで指示されている(聞き手領域にア)。

話し手と聞き手の中間領域のアについては話し手と聞き手の直線上ではなく、聞き手よりの前方やや左右に見られた。ただし、これについては2.5m以上～3m未満(図7)の場合のみであり(これ以上離れた場合にはない)、今後データを増やし確認していくことが必要であろう。

また、先にも述べたが、本調査では全体的にソの数が安部(2008)より少ない。本調査の結果として、話し手よりのものはコ、そして聞き手よりのものはアの傾向が安部(2008)よりも強い結果となった。

## 5.3 聞き手53番での距離別分布図の解説

聞き手53番について、聞き手の位置を高橋・鈴木(1982)・安部(2008)から変更したため、そのまま比較はできない。

### (H) 話し手から聞き手までの距離：0.5m以上～1m未満（2人）図10

話し手を中心に半径およそ1.3mの円(①)を描くと①の内側はすべてコであり、①の外側に半径およそ3.3mの円(②)を描くと②の内側には(①の内側を除く)コ・ソ・アが混在する。②の外側はすべてアである。話し手の側面にはソが見られるが後方にはない。

### (I) 話し手から聞き手までの距離：1m以上～1.5m未満（3人）図11

話し手を中心に半径およそ1.3mの円(①)を描くと①の内側はすべてコであり、①の外側に半径およそ3mの円(②)を描くと②の内側には(①の内側を除く)コ・ソ・アが混在する。②の外側はすべてアである。(H)と同じく話し手の側面にはソが見られるが後方ではなく、またアがより聞き手近くに出ているところは、聞き手34番の同じ距離の場合と相違するが、その他の分布は34番の場合と大きく変わらない(「われわれ」指示)。



**(J) 話し手から聞き手までの距離：1.5m以上～2m未満（2人）図12**

話し手を中心に半径およそ1.2mの円①を描くと①の内側はすべてコであり、①の外側に半径およそ3.1mの円②を描くと②の内側には（①の内側を除く）コ・ソ・アが混在する。②の外側はすべてアである。（H）（I）と同じく、話し手の側面（よりやや前）にはソが見られるが、後方にはない（アがそれほど遠くない位置に出る）。

**(K) 話し手から聞き手までの距離：2m以上～2.5m未満（2人）図13**

話し手を中心に半径およそ1.8mの円①を描くと①の内側はすべてコ系であり、①の外側に半径およそ3.3mの円②を描くと②の内側には（①の内側を除く）コ・ソ・アが混在する。②の外側はすべてアである。（H）～（J）と同じく、話し手の側面（よりやや前）にはソが見られるが、後方にはない。なお、聞き手34番の場合には、この距離で聞き手領域（ソ）の層の形成が見られ始めたが、この53番の場合には聞き手の前後左右の席に対象物を設定しなかったため、分析できなかった。

**(L) 話し手から聞き手までの距離：2.5m以上～3m未満（1人）図14**

話し手を中心に半径およそ2.4mの円①を描くと①の内側はすべてコであり、①の外側に半径およそ3.3mの円②を描くと②の内側には（①の内側を除く）コ・ソ・アが混在する。②の外側はすべてアである。上記の（K）と同じく、聞き手の前後左右の席に指示物を設定しなかったため、聞き手領域（ソ）の層を形成しているかどうか分からない（聞き手近辺については、ソがなくコかア）。

**(M) 話し手から聞き手までの距離：3m以上～3.5m未満（7人）図15**

話し手を中心に半径およそ1.2mの円①を描くと①の内側はすべてコであり、①の外側に半径およそ1.8mの円②を描いても1つソが出るのみで、②の内側はほぼコである。ソは聞き手を中心として半径およそ1.8mの円を描くと、その円の内側に偏る。聞き手領域（ソ）の層が形成されていると考えられるが、話し手の後方にソが見られることから、話し手からの距離のソも観察できる。なお、（コ・ソも混じるものの）①と②の外側がアである。聞き手34番と、位置は違うが安部（2008）の同じ距離の結果と類似している（ソの数も（回答者同じ7名）、本調査38、安部2008は42と、ほぼ同じ）。

**(N) 話し手から聞き手までの距離：3.5m以上～4m未満（2人）図16**

話し手を中心に半径およそ2.1mの円を描くと、その円の内側はすべてコ系である。また聞き手を中心に半径およそ1.9mの円を描くと、その内側の聞き手の側面より前方は、ほぼソである（ただし、その外側にもソは見られる）。

**(O) 話し手から聞き手までの距離：4m以上～4.5m未満（2人）図17**

話し手を中心に半径およそ2.4mの円を描くと、その円の内側はすべてコである。ソは聞き手を中心とした半径およそ2.6mの円の内側にあるが（聞き手の側面から前方）、ソよりもアのほうがやや多く、さらにより聞き手近くにアが出ている。また、話し手と聞き手の中間領域にもアが見られる（聞き手53番では、この距離のみ）。

#### (P) 話し手から聞き手までの距離：4.5m以上～5m未満（1人）図18

コは話し手を中心として半径2.1mの円の内側に、ソは聞き手を中心として半径およそ1.9mの円の内側にあり、これらの領域は重ならない。この二つの円の外側にアが見られる。

#### 5.4 聞き手53番のまとめ

聞き手53番は、上記で述べたように聞き手の前後左右の席に指示物を設定しなかったため、特に2mを越えた場合において聞き手34番で見られた、聞き手領域（ソ）の層の形成が観察できなかった。また、53番は（やや）中央部に位置し、あまり34番と違った調査ができていないと考えられる（特に、話し手と聞き手の距離がかなり離れた観察ができていない）。

結果としては、1）3m以上は聞き手領域（ソ）の層が形成されており、また同じ距離において話し手からの距離によるソが見られる、2）3.5m以上で話し手と聞き手の層は分離しており、4m以上～4.5m未満の距離で話し手と聞き手の中間領域でアが見られる、3）3.5m以上（図16、17）で数は少ないが、聞き手領域にアが見られる等が指摘できる。

#### 6. 全体のまとめと課題

本論では、2010年中四国地方の20歳前後の若者における直示用法の用法を調査し、分析をおこなった。傾向として（特に聞き手34番）、ソの数が安部（2008）に比べ少なく、話し手近辺はコ、聞き手近辺はアという傾向が見られた。これについて中四国地方の若者の特徴（聞き手にあまり配慮せず、話し手中心の距離区分を優先する）であるのか、本論の調査方法による偏りであるのか、さらに調査をおこない確認していく必要がある。

なお、今回の結果である1）話し手の後方にソが出る、2）聞き手領域にかなりアが食い込んでいる、3）話し手と聞き手の中間領域にアが見られる、について筆者（岡崎）は、1）の後方のソは使用しにくく（側面については、可能であると感じる）、2）聞き手領域と3）話し手と聞き手の中間領域にアは使用しない。そのため調査している最中から、話し手である学生の回答に違和感を覚えた。これらについては佐久間（1951）、三上（1970）、田窪（2010）等の先行研究も踏まえ、議論していかなければならないが、紙幅の関係から出来なかった。これについては稿を変えて考察していきたい。

最後に、今後の調査のために、調査法をさらに整備していく必要があると考えられるが、特に感じた課題について以下にまとめておく。

(3) (i) 話し手（回答者）も立たせて答えさせたため、指示物（札を持った学生）に対し、体の向きを変えてしまうことがあった。このような場合、聞き手に対して背を向けてしまうこともあり、話し手と聞き手が相互に向き合って答える場合と違う回答が出てしまう可能性がある。この点については、出来る限りこちら（聞き手）の方を向いたままで答えるように指示したが、今後も徹底させるべきであろう。

(ii) 本論では高橋調査法を変更し、聞き手の位置を31番から53番へと移動したが、

聞き手53番のまとめでも述べたように、あまり34番と違った観察ができておらず、また話し手と聞き手の間の距離がかなり離れたものを観察できないことが分かった。今後は、1) 聞き手53番ではない場所に設定する、2) 指示物の位置を変更する、3) もう少し広い場所で座席数を増やすか、聞き手を一カ所にして指示物を増やす、等にした方が良くと思われる。

(iii) 高橋・中村(1992)でも指摘されているように、調査中、聞き手の存在を薄くして回答してしまう人が出てくることが予想される。特に、何度も質問した後に(疲れから)出る場合があると考えられ、途中で休憩を取る等(もしくは質問方法をより聞き手を意識させるものに変更する等)工夫が必要であろう。

(iv) 今回、放課後を利用して調査したこともあり、すべての席に常に人を座らせて調査することが出来なかった。すべての席に人が常に座って指示する場合と、そうでない場合とでは結果に相違がでると考えられる。これについても条件の統一が必要であろう。

## 注

注1 科学研究費補助金基盤研究C「方言・歴史・理論の融合を目指した日本語指示詞の研究」(代表:岡山大学・堤良一)の研究分担者として、方言における指示詞の調査・分析をおこなっている。

## 参考文献

- 岡崎友子(2010)『日本語指示詞の歴史的研究』ひつじ書房
- 安部清哉(2008)「指示代名詞の現場指示の領域—高橋調査法による2008年若者のコソアド—」『学習院大学文学部研究年報』55、pp.1-50.
- 金水敏・田窪行則(1992)日本語研究資料集1-7『指示詞』ひつじ書房
- 佐久間鼎(1951)『現代日本語の表現と語法(改訂版)』厚生閣
- 高橋太郎(1956)「[場面]と[場]」『国語国文』25-9、京都大学国語国文学研究室(金水・田窪編(1992)に再録、pp.38-46)
- 高橋太郎・鈴木美都代(1982)「コ・ソ・アの指示領域について」国立国語研究所報告71『研究報告書』3、秀英出版、pp.1-44.
- 高橋太郎・中村祐理子(1992)「1991年、わかものコソアド」『麗澤大学論叢』3、pp.1-35.
- 中村祐理子(1990)「現在におけるコソアドの変化についての実験的研究」『麗澤大学紀要』51、pp.17-47.
- 田窪行則(2010)「第5章 日本語指示詞の意味論と統語論—研究史概説—」『日本語の構造推論と知識管理』くろしお出版、pp.289-316.
- 服部四郎(1961)「[コレ][ソレ]とthis、that.」『英語青年』107-8(金水・田窪編(1992)に

再録、pp.47-53)

服部四郎 (1968) 「コレ・ソレ・アレと this、that.」『英語基礎語彙の研究』三省堂、pp71-80.

堀口和吉 (1978) 「指示語の表現性」『日本語・日本文化』8、大阪外国語大学 (金水・田窪編 (1992) に再録、pp.74-90)

三上 章 (1970) 「コソアド抄」『文法小論集』 pp.145-154、くろしお出版.

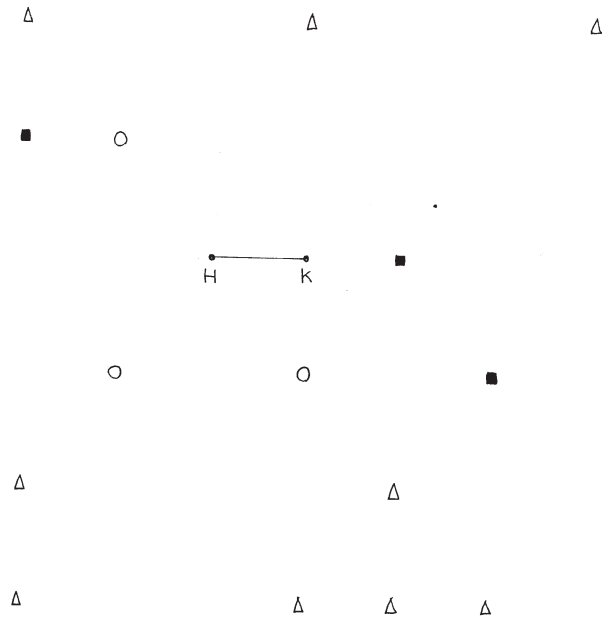
宮田幸一 (1961) 「日本語と英語の指示詞」『英語青年』 107-8、pp20-21.

**追記**：調査法について、安部清哉先生に様々なアドバイスを頂いた。また就実大学大学院生、郭恩恵さん、金河さん、妹尾樹代子さんに調査の補助をお願いした。記して感謝したい。

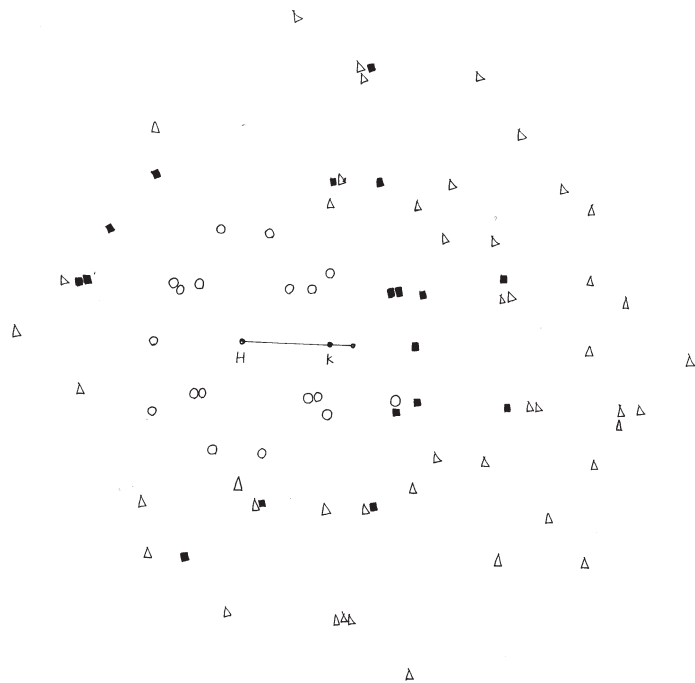
なお、本研究は科学研究費補助金基盤研究C「日本語の連文における「接続語」の理論的基盤の構築」(課題番号：22520481、代表：岡崎友子)、および基盤研究C「方言・歴史・理論の融合を目指した日本語指示詞の研究」(課題番号：20520387、代表：堤良一)の成果の一部である。

※以下の図については、聞き手が「K」、回答者(話し手)が「H」、○:コノ、■:ソノ、△:アノを示す。

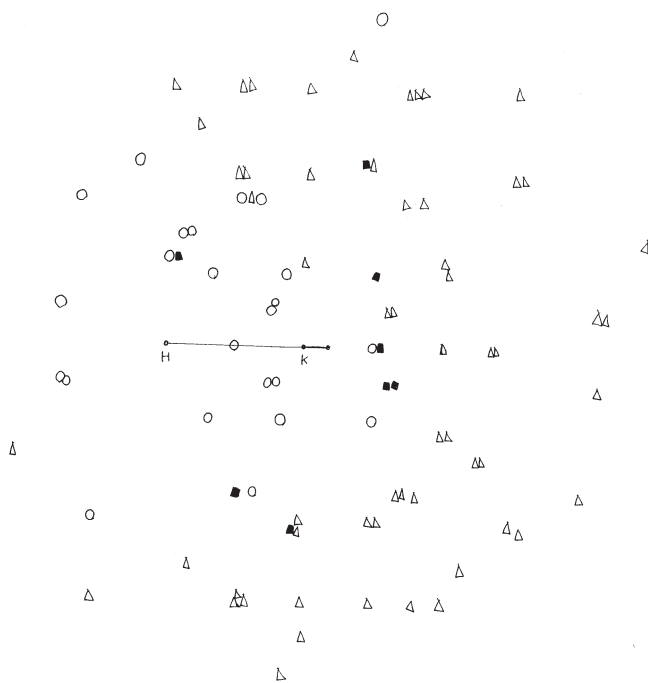
(A) 話し手から聞き手までの距離：0.5m以上～1m未満（1人） 図3（聞き手34）



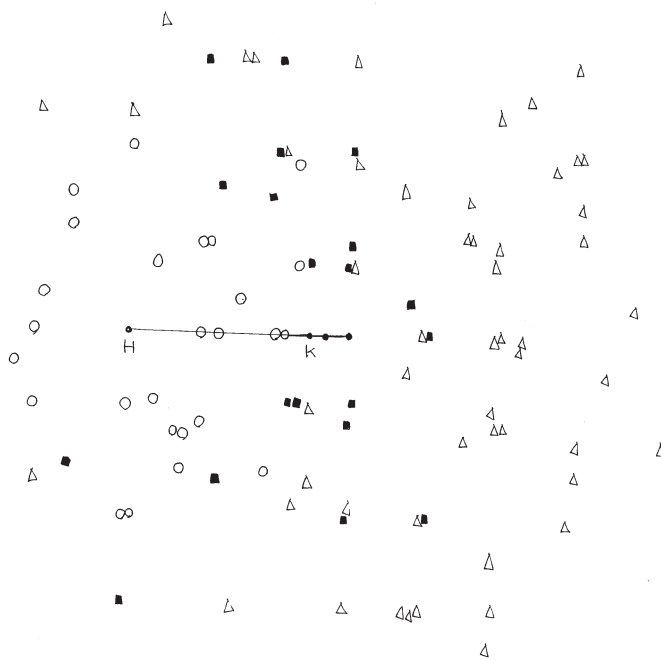
(B) 話し手から聞き手までの距離：1m以上～1.5m未満（5人） 図4（聞き手34）



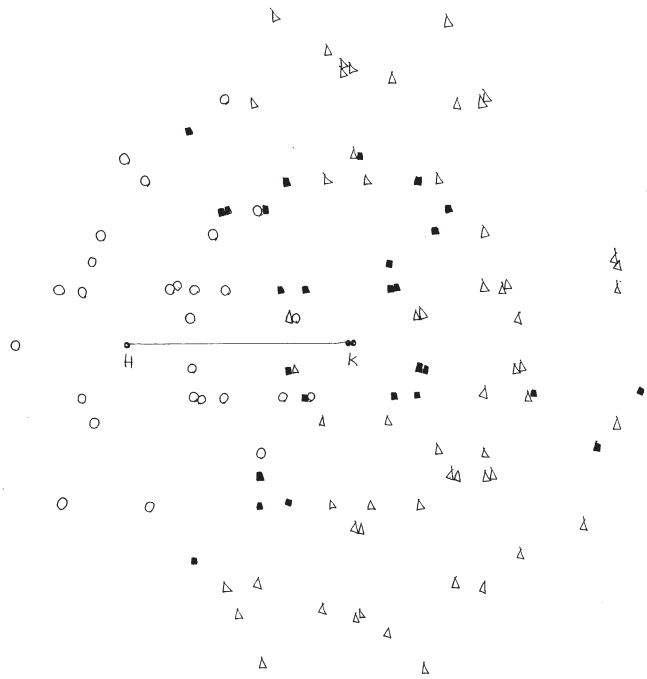
(C) 話し手から聞き手までの距離：1.5m以上～2m未満（6人）図5（聞き手34）



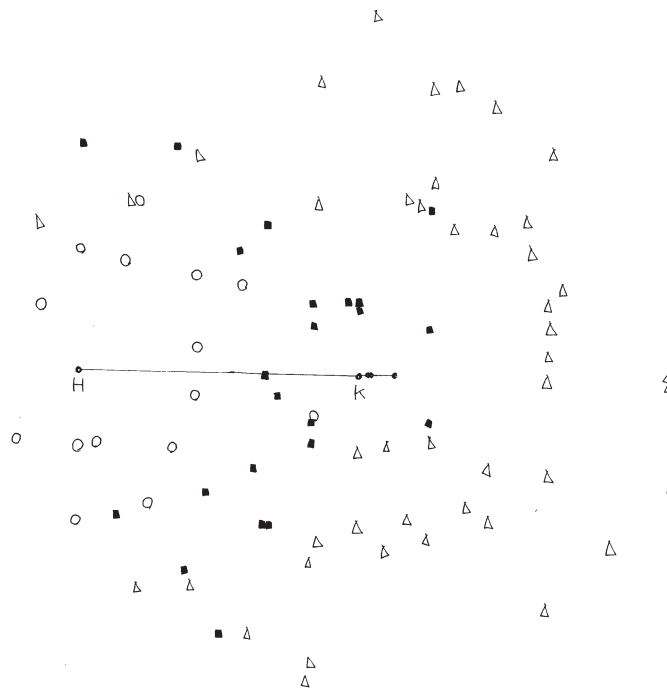
(D) 話し手から聞き手までの距離：2m以上～2.5m未満（6人）図6（聞き手34）



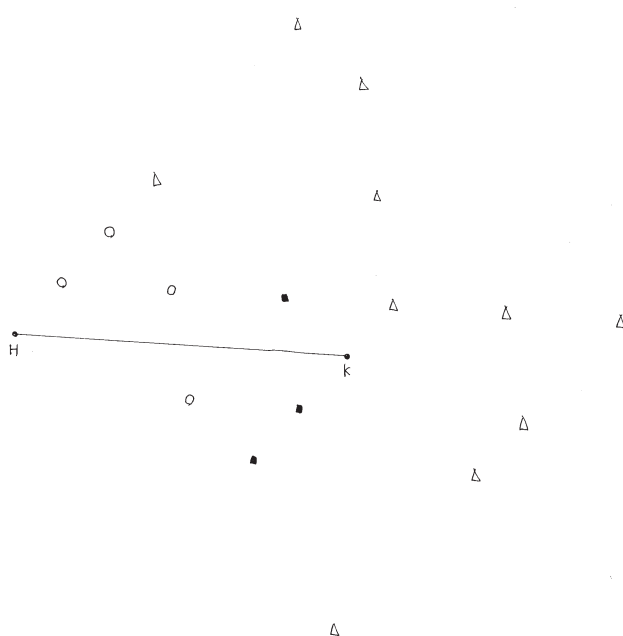
(E) 話し手から聞き手までの距離：2.5m以上～3m未満（7人） 図7（聞き手34）



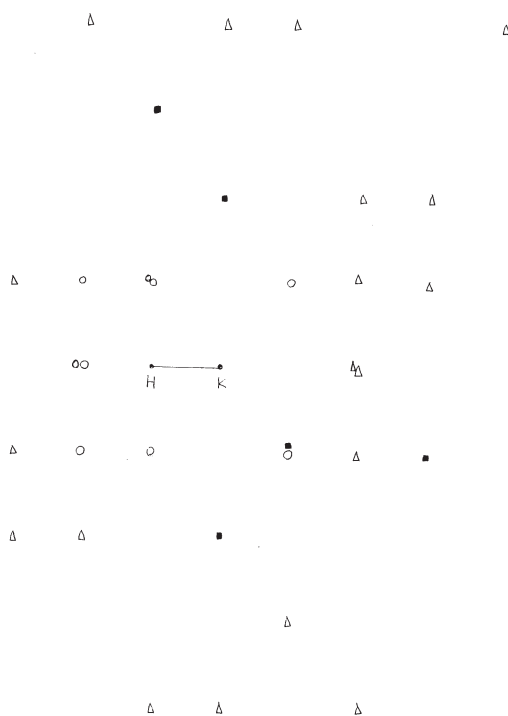
(F) 話し手から聞き手までの距離：3m以上～3.5m未満（5人） 図8（聞き手34）



(G) 話し手から聞き手までの距離：3.5m以上～4 m未満（1人） 図9（聞き手34）

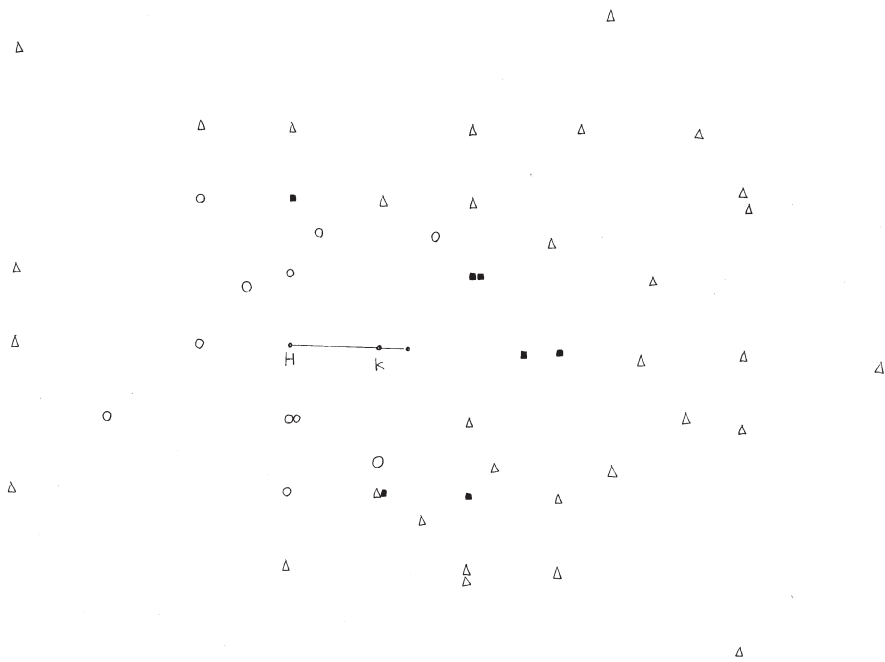


(H) 話し手から聞き手までの距離：0.5m以上～1 m未満（2人） 図10（聞き手53）

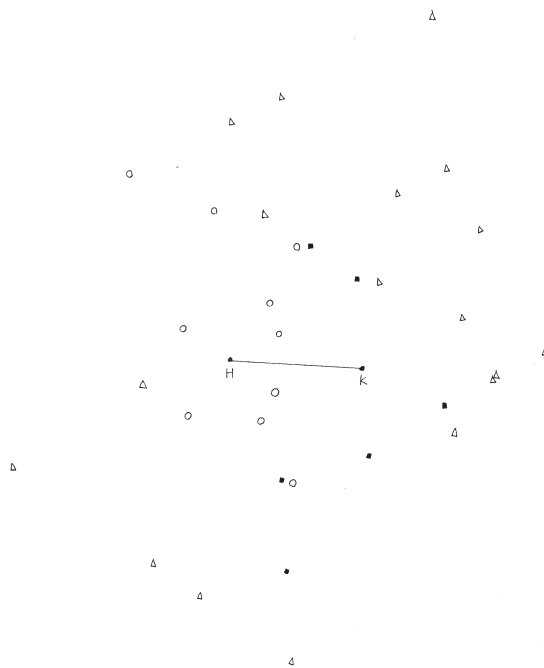




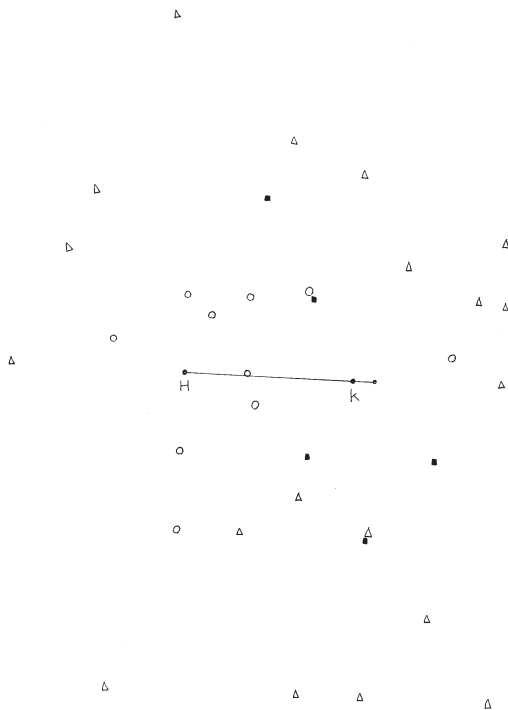
(I) 話し手から聞き手までの距離：1 m以上～1.5m未満（3人） 図11（聞き手53）



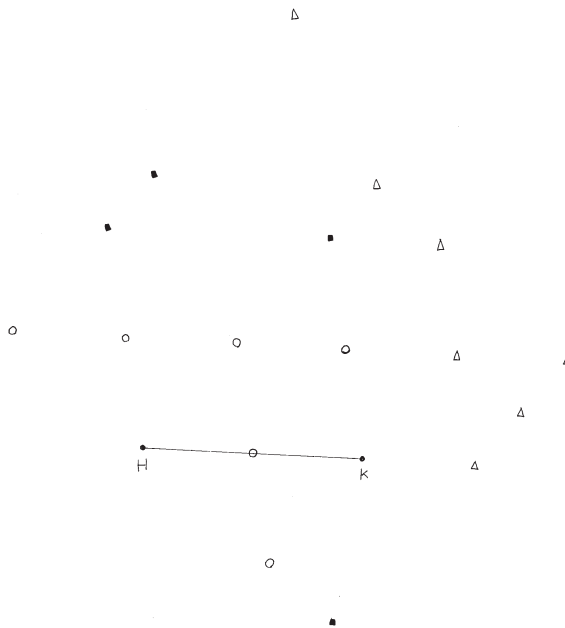
(J) 話し手から聞き手までの距離：1.5m以上～2 m未満（2人） 図12（聞き手53）



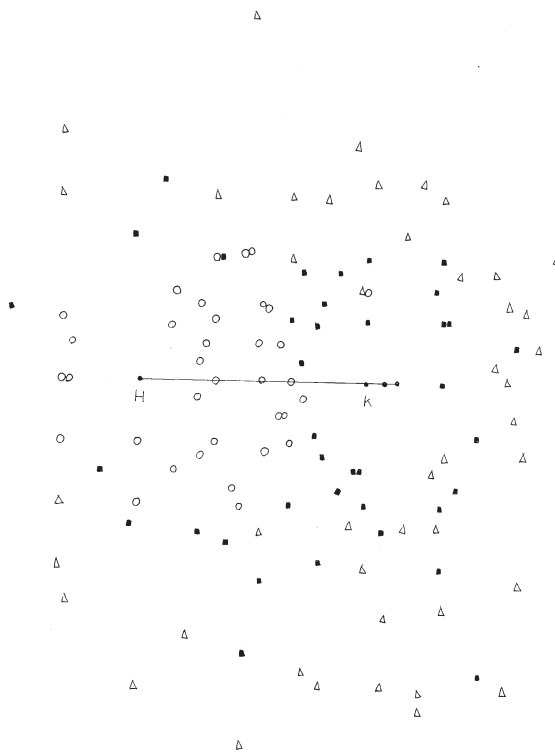
(K) 話し手から聞き手までの距離：2 m以上～2.5m未満（2人） 図13（聞き手53）



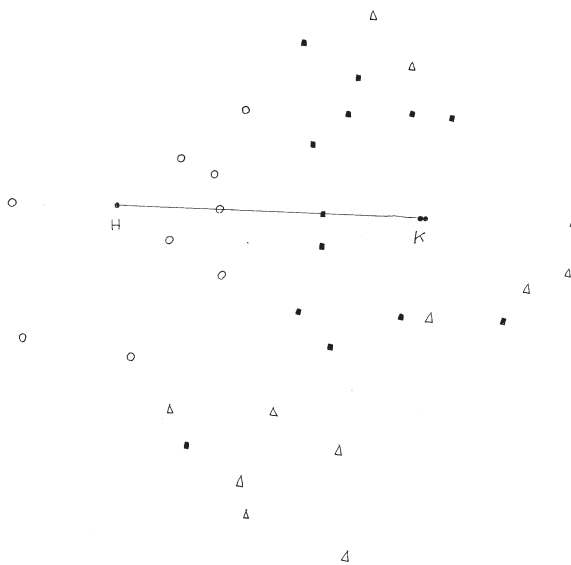
(L) 話し手から聞き手までの距離：2.5m以上～3 m未満（1人） 図14（聞き手53）



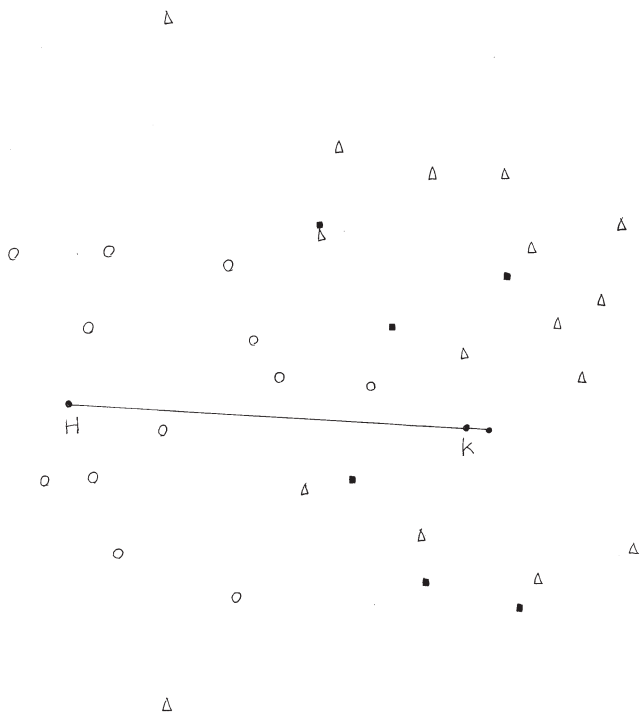
(M) 話し手から聞き手までの距離：3 m以上～3.5m未満（7人） 図15（聞き手53）



(N) 話し手から聞き手までの距離：3.5m以上～4 m未満（2人） 図16（聞き手53）



(O) 話し手から聞き手までの距離：4 m以上～4.5m未満（2人） 図17（聞き手53）



(P) 話し手から聞き手までの距離：4.5m以上～5 m未満（1人） 図18（聞き手53）

